**祇王寺**

かつて尼寺であった祇王寺は、京都西部の嵯峨嵐山の奥にある奥嵯峨地域の山腹に佇んでいます。このお寺は、素朴なかやぶき屋根の建物を取り囲む緑豊かな苔とモミジの庭園で有名です。祇王寺の歴史は、後に尼となった舞踊家の祇王との強い結びつきもあり、祇王の物語は13世紀の軍記物語の傑作である『平家物語』に詳しく書かれています。

平家物語によると、祇王は、京都で最も権勢を誇った武将である平清盛（1118～1181）の寵愛を得た才能のある舞踊家（白拍子）でした。祇王は数年間は清盛の寵愛を受けていましたが、清盛はその後、仏御前という名の若い白拍子に心変わりしました。祇王は清盛の傍から追い出されただけでなく、清盛は彼の新たに寵愛する女性のために舞を披露するよう強要しさえしました。悲しみに打ちひしがれた祇王は自害を考えましたが、最終的に都を離れ、母の刀自と妹の祇女と共に尼になる道を選びました。彼女たちは、奥嵯峨地域にあった往生院と呼ばれる大きな寺院の境内の草庵に住み、祈りに人生を捧げました。仏御前は、自分も結局は捨てられるであろうことに気付き、自分が原因となった苦悩を贖うことを望んでいたため、この3人の女性たちの後を追い、そして彼女たちは終生尼として過ごしました。

後に、往生院の敷地内にあった小さな尼寺は、祇王を偲んで祇王寺として知られるようになりました。往生院が荒廃した後も、明治政府が1868年に神仏分離を命じたことにより仏教寺院が衰退するまで、その尼寺は活動を続けていました。1895年、祇王寺の仏像などを保管していた近隣の大覚寺の支援を受けて、祇王寺は再建されました。畳の床と格子付きの丸窓を備えたかやぶき屋根の建物は、寺院の再生を支援するため、元京都知事から寄付されました。現在この建物には、大日如来が本尊として祀られており、その両脇には、祇王、祇女、刀自、仏御前、そして清盛の像が安置されています。それらの像の内、祇王と祇女の像は鎌倉時代（1185～1333）作と考えられています。この近くには、ささやかな墓地と、祇王の物語の登場人物を供養する2つの大きな石塔があります。左側の高い方の石塔は、祇王、祇女、刀自を供養するもので、右側の石塔は清盛に敬意を表するものです。

祇王寺の有名な庭園にはモミジがたくさんあり、境内のほとんどはじゅうたんのような豊かな苔に覆われています。そこには20種類以上の苔が生えていますが、その自然の美しさを最大限に生かすため、十分に手入れされています。庭園の一角では祇王寺の庭に生息する様々な種類の苔のサンプルを展示していて、様々な質感や色合いを見せてくれます。庭園の小道は、常緑の椿、曲がりくねった小川、垣根のすぐ向こうにある竹林、そして石灯籠や水琴窟などの伝統的な景観装飾の間を通りながら蛇行しています。この庭園は特に秋に人気を集めますが、どの季節でも美しい景色を提供しています。